フランシス・プレースとその人口論

北　進　一

一

フランシス・プレースはイギリスに於ける初期の勞働運動の指導者として知られてゐる。たとへばウエッブの「職工組合の歴史」やウエストの「チヤーティスト運動の歴史」などに出て來るプレースは、勞働運動及び政治運動の一指導者としての彼であり、グラハム・ワラスのプレース傳もまたこの觀點から記述されてある。しかし彼れには人口論上の一著作があつた。そしてこの人口論こそ、彼れの全生涯にわたりての代表作をなすのであつて、「實際運動家としてのプレース」以外に、世にあまり多く語られざる、理論的著作家としてのプレースの半面を傳へるものである。その謂ゆる人口論的著作とは、一八二二年ロンドンに於いて出版された「人口原理の解明と論證」――詳しくは Francis Place, Illustrations and Proofs of the Principle of Population : including an

examination of the proposed remedies of Mr. Malthus, and a reply to the objections of Mr. Godwin and others, London 1822.

――がそれである。

いま私の机上には、ダニエル・マクリスの筆になつたプレースの肖像をうまくそのダスト・カヴアーに浮かせた氣持よき右著作の復刻版（ロンドン一九三〇年）が、このほど書店から屆けられて横はつてゐる。その復刻の意圖はやゝ異なつてゐるにしても、先年ゼームス・ボオナーによつてマルサス人口論の第一版が復刻されたと同じ周到な用意のもとに行はれたのであつて、精妙な寫眞印刷をもつてしたるがため、字體、組版、紙數は原版と寸毫の差もなく、原版に於ける若干の誤植さへ、卷末に正誤表を附することによつて、そのまゝに復寫されてある。しからざれば、百金を投ずるも容易には手に入れがたきこの稀書をば、人は今や僅かに若干圓の價に於いて自己の所有とし、價高き原版に對すると同じ氣持でこれを繙きうる。よろこばしいことである。

編纂者はワーセスター（マサチユセツト州）のクラーク大學經濟學教授ノーマン・ハイムズ氏であつて、この數年來盛んに、產兒制限に關する文獻史的研究を發表してゐる人である。本書の復刻もまた同じ動機に出でたのであつて、プレースをもつて近代的產兒制限運動の創始者とするの見地より行はれてゐる(1)。本文は原著者の序文十五頁を合せて二百九十五頁であるが、その前には六十三頁にわたる「編纂者序言」が付せられ、卷末にはプレースの書簡、原版への註解、その他およそ七十五頁が添へられてある。書簡は產兒制限に關聯するものを集めてあるが、編纂者の言葉によれば、關係書簡はこれをもつて盡きたりとせず、引續いて刊行せらる

べき編纂者自身の著作「イギリス産兒制限運動の文獻史」および「ジョン・スチュアート・ミルと産兒制限論争の發端」においても併せ公表されるとのことである。

(1) 復刻版の標題は從ひてまた次のやうに書き加へられてある（下線は本稿の筆者）。

Illustrations and Proofs of the Principle of Population. By Francis Place. Being the first work on population in the English language recommending birth control. Now exactly reproduced with an introduction demonstrating Francis Place as the founder of the modern birth control movement, together with unpublished letters of Place on birth control, Coleridge's criticisms of Malthus' views on birth control, critical and textual notes by Norman E. Himes. London 1930.

二

本文に入るに先だち、こゝに少しくプレースその人について回顧の筆を運ぶことを許されたい。

フランシス・プレース（一七七一―一八五四年）はその後半生を「成功せる仕立屋の主人」として富裕な生活を送つた人であるが、生れた家は決して裕福ではなかつた。父は初めはその日暮しのパン屋であつたが、プレースの生れたときはマーシヤルシイ裁判所の番人を勤めてをり、後には居酒屋などを開いたらしい。家庭は從ひて良くはなかつた。父は酒に親しみ、賭博を好んだ。プレースは十四才の時から leather-breeches（皮の股引）を作る職人として年期奉公にやられた。彼れ十九才、彼女十七才にて、彼れは Elizabeth Chadd と結婚した。その翌々年、彼れは仲間の職人と共謀でストライキを起したが、不成功に終り、のみならず彼れは主謀者

として解雇され、その後八ケ月間は如何なる雇主をも見出し得なかつた。彼れは妻と子を抱へて全く途方に暮れてしまつた。窮民の群に入り、つぶさに社會的苦惱をなめた。彼れはしかし、この失職の苦しい期間に、何ものにも代へがたい尊い收獲をえた。經濟學研究への異常なる彼れの興味は全くこの期間に進められて行つたのであつて、勞働運動の指導者として後生涯を捧げんとするその固い信念もまた、この間に培はれたのである。

彼れはその後各所の職工クラブの書記をしたり、元の職人に復したこともあるが、有爲なる指導者となるためには先づ自から產をなすに若かざることに想ひ到り、一七九九年即ち彼れ二十八才のとき一人の仲間と共同してロンドンの Charing Cross 街で仕立屋を開店したが、翌年からはプレース一人で經營することとなつた。これが成功して年收益が三千磅に達するほどになつたと傳へられてゐる。かくしてプレースはその營業所の奧座敷に宏壯なライブラリーを設け、こゝに豐富な文獻と資料とを集めて自家の研究を進める一方、學者知友に開放してその研究に資せしめ、かねて政治運動、勞動運動の參謀本部たらしめた。

一八一八年その營業を息子に讓つてからは、プレースは專ら政治運動に力を注ぐことになつた。彼れが社會的諸立法の促進の上に致した功績は大きいが、とりわけ記憶さるべきは勞働組合法の改正と選擧法の改正とであつた。上田博士がかつて（大正十年五月、商學研究第一卷第一號）シドニイ・ウエツブを引用してうまく描寫されたやうに、社會上の理論においては彼れはベンタム及びゼームス・ミルの弟子であり、その理想とする

ところは、政治上の民主主義と産業上の自由主義とを結びつけんとするにあつた。しかして彼れが標榜した具體的な政策の綱領は、勞働者の教育及びその精神的向上を目的とするにあつたのである。

しかし彼れが一個の著作家として認められたのは、今こゝでそれについて語らうと思ふ「人口原理の解明と論證」であつて、これは彼れ五十一才の時の作である。しからばこの著作はどういふ問題を取扱ひ、どういふ地位を人口思想史上に有するものであらうか。

三

プレースの人口論は、直接的にはマルサス對ゴドキンの論爭を主題とし、特にゴドキンの第二答辯書(後出)を駁擊することによつてマルサス說の眞理性を論證せんとしたものであるが、政策上においてはマルサス說に反し、今日いはゆる新マルサス主義の先驅的提案をなすに至つた。しかしてこの政策上の新提案こそは、本書復刻版の編纂者ハイムズ教授をして、近代的產兒制限運動の創始者としてのプレースの地位を高揚せしむるに至つたものである。

人の周ねく知るやうに、マルサスは人口增加に對する妨げの種類として、客觀的には積極的妨げ、及び豫防的妨げの二者を擧げ、主觀的には惡德、慘禍、および道德的抑制の三者を掲げた。そして惡德を伴はざる豫防的妨げはただ道德的抑制あるのみとして、特に一國の貧困層たる勞働者階級に對してこれを行ふべきことをす

すめた。しかして道德的抑制とは、家族を養ひうるの見込あるまで結婚を差控へ且つその間完全に童貞を守るといふことであつた。マルサスはさすがに、身をもつてこれを實踐したらしい。（註に曰く、マルサスが結婚したのは滿三十八才、尨大なる人口論第二版を刊行した翌年であり、同時にこのときは、大學教授への就任がすでにほぼ確定してゐた。）だが、勞働者階級への說法としてはそれは全く無力であつた(2)。第一にプレースが自から、實踐においてマルサス說に反旗をひるがへした。彼れは早くも十九才において結婚した。そして一七九二年から一八一七年までの間、即ち二十五年間に彼れは十五人の子供の父となつた（復刻版、編纂者序言一〇頁）。

(2) 南亮三郎著、人口法則と生存權論、昭和三年同文館刊、第五篇「人口論」の社會政策、參照。

かやうにしてプレースは、おそらくは根柢的には自己の經驗から、およびそれと並んでの理論的考察から、マルサスの主張せる晩婚——道德的抑制の實行不可能であることを知つた。實行性を帶びた方策は、早き結婚を妨ぐるものであつてはならぬ、同時に、その結果を未然に防止する手段は最小の惡として——或ひはむしろ善と解する新道德の立場から——許容されねばならぬ。しかしてこの兩者の結合こそは、謂ゆる新マルサス主義の主張の要點をなすのであつて、ハイムズ教授の表現を用ふれば、本書第六章第三節の "epoch-marking Section" にその最も早き叙述（ただしその叙述は甚だ消極的であるが）を見たのである。

尤も產兒制限論の歷史を繙いてみると、この意味における豫防的制限を說いたものは早くからあつたし、ま

た部分的に實行されて來たことは各國民の古き歴史が示すところである。イギリスにおいてもプレースの前に、ゼームス・ミルがこれを說いた。しかしその叙述は組織だつた主張の形をとらなかつたし、また、よしんばかやうな主張があつたとしてもミルをもつて今日の意味における國際的な産兒制限運動の創始者であるとは云ひえない。なぜならミルは何等の宣傳も組織的運動も企てなかつたから。

イギリスに現はれたもので、産兒制限の醫學的並に社會的部面を大膽に論述した最初の書物は、一八二六年に出版されたリチヤード・カーライル（文豪のトマス・カーライルとは違ふ）の "Every Woman's Book" であらう。これに次いで一八三〇年に、ロバアト・デール・オーウエンの有名な "Moral Physiology" がニユーヨークで出版され、越えて一八三二年にチヤールズ・ノールトンの "Fruits of Philosophy" が同じくニユーヨークで上梓されたのである。かやうにして今日の産兒制限運動はその理論的根基を据えられ、またこれをもつてこの運動の發端となすを普通とするのであるが、ハイムズ教授の考證によれば、プレースはこれよりも早く、その人口論を出版した翌年即ち一八二三年の夏に既にこの種のプロパガンダを始めたのであり（編纂者序言、四四頁）、また事實、前掲の諸家は直接間接、プレースからの刺戟を受けたところである。

ただしプレースの人口論そのものは、出版當時あまり世人の注意をひかなかつた。これに關する紹介批評の類もまた決して多くはない。殊にその出版部數は今日想像される以上に少なかつたらしい。この方面にくわしいロンドンの或る古本商は、その出版部數は五百部を超えてはゐまいと推定したが、事實彼れ自身は、永い年

月の間にこの原版が流布するのを見たのは僅かに數回に過ぎぬと云ふことである。ゆゑに國際産兒制限運動に及ぼしたプレースの影響は、この書物を通じてよりも、むしろ他のプロパガンダによつてであると云はねばならない。プレース人口論の今回の復刻について私が特に興味を感ずるのは、それゆゑに、彼れが産兒制限論の最初の提唱者であつたといふためばかりではない。この著作が取扱つた主題そのものに、私は特別の興味を覺えるのである。

四

前掲「人口法則と生存權論」の著者は、その序文（二―三頁）でかう認めてゐる。――

マルサスの「人口論」がその初め、ゴドキンの「政治的正義」並に「研究者」に對する評論としてものされたといふことは、經濟學を學んだものは誰れでも知つてゐる。しかし、かくの如き反駁を受けた當のゴドキンがこれに對して如何なる答辯をなしたかといふことは、何人もが興味をもつて知らんと欲するところであるけれども、學界不幸にして未だ、充分に同情ある研究を有しない。從ひて人が常に、マルサスが勝つてゴドキンが負けたんだと考ふるに何の無理もない。しかし當のゴドキンは、決して自分が負けたんだとは思つてゐなかつた。一八〇一年には、簡單ながらも示唆深き答辯書を出だし、更に一八二〇年には、堂々六百頁を超ゆる第二答辯書――「人口研究・マルサス說駁論」を公けにして、マルサス說を根柢より破壞し得たと

信ずることに依つて自から餘生を慰めたのである。

右に謂へるゴドキンの「人口研究」については、當時「エディンバラ・レヴュー」に激越な一批評文が現はれたが、マルサス自身は自己の名をもつては直接これに答ふるところがなかつた。ゴドキンの著作は云はゞ世間から默殺された形になつてゐた。ところが今、このゴドキンの「人口研究」を秩序だつて研究し、特にスエーデン、アメリカ、及びイギリスについての詳密なる人口統計的研究から、ゴドキンの犯した誤謬を摘發する一方、マルサス說の眞理性を論證せんとしたものが、こゝに謂ふプレースの「人口原理の解明と論證」なのである。マルサス對ゴドキンの終生にわたる人口論爭の研究に對しては、それゆゑにこの著作は、なくてはならない貴重な文獻である。

イギリスにおけるマルサス研究の權威者ポオナー博士は、不思議にもその著「マルサスとその業績」においてプレースの著作には觸れなかつた。プレースの名が現はれて來るのは僅かに一回、しかもマルサスの書簡に關聯してである（第二版四二二頁）。ハイムズ教授の考證によれば、プレースの重要をみとめた經濟學者の最初の一人は「經濟學原理」におけるマーシアルであつた。マーシアルは云ふてゐる。「フランシス・プレースは彼れ（マルサス）の多くの缺陷に盲目ではなかつたが、一八二二年に、語調と判斷とにおいて勝れたる辯護論を彼れのために草した」と（第八版一七九頁脚註）。しかしてこの一句は一八九五年の第三版において初めて挿入されたものである。

プレースの著作は、しかし、マルサス説のための單なる一辯護論ではなかつた。謂ゆる人口法則が人間社會に作用するといふこと、即ち人口は食物以上に增加せんとする不斷の傾向あり、この傾向よりして人間社會の主たる慘禍と貧困とが招來されるといふこと、同時に、勞働市場は常に供給過多となつてその價格たる賃銀を最低限に低めんとする傾向ありといふ根本的認識においては、プレースは全くマルサスの立場を踏襲し、且つ力を極めてこれを辯護した（本文二五九―二六八頁）。しかしプレースは、前に述べたやうにマルサスにおける道德的抑制は毫も問題の解決を意味しないとの考へからこれに代ふるに他の豫防的制限、即ち今日の意義における產兒制限を提案したことのほかに（本文特に一七五頁以下）、貧民の生存權を否定せんとしたマルサスに反してこれを主張した（同一三七頁以下）。が、プーレースにおいては、生存權の認承はおよそ如何なる影響を人口運動に及ぼすに至るべきかの根本問題は、回答を與へられずに殘されてゐる。これはプレース人口論の第一の不徹底さである。――さらに重要なることには、彼れは惡政の人口問題に及ぼす影響を認め、社會制度は可變のものであつて、よりよく改善しうることを信じた。この點においてはプレースは、むしろゴドヰンの味方だつたのである（同一二七頁以下）。ただ然し、たとひよき民主的政府であつても、法外な人口增加によりて誘發さるゝ困窮は到底これを防ぎえないといふ一點においては、彼れの所說は結局、マルサス的悲觀論に一致し、到底、社會制度の改善は人口問題を解決しうるとの社會主義的立場には移りえなかつたのである。この點、勞働運動の一指導者としての彼れの立場からは已むをえないところであつたらうが、理論としては少な

からず徹底さを缺くものと云へよう。

プレースのこの著作は、かやうにして、産兒制限論の最初の表現としてと同時に、或はそれ以上に、マルサス對ゴドヰンの論爭の正しき理解に役立つものである。ゴドヰン「人口研究」の徹底的研究は、少くとも、この著作を顧慮することによりて十全を期しえらるゝであらう。私はさういふ意味においても、この書の復刻を喜ぶものである。